二〇一二年二月一一日

春の雪残る布袋の腹の上　とろうち
梅探る城趾といへど土塁のみ　小袖
春の雪被き一番電車来る　よし女
瀬田の橋ながめに美味し蜆汁　つくし
沖遠く漁火一つ冴返る　宏虎
紙雛厨に吾子のプレゼント　あおい
日野原師未来を語る建国日　菜々
甘酒を双手包みにいただきぬ　あさこ
堵列せる出土の埴輪あたたかし　せいじ

二〇一二年二月一〇日

慟哭の声閉じ込めし涅槃図絵　菜々
大き尻でんぐり返る春の鴨　とろうち
涅槃図に膝行したる俳徒どち　きづな
一幅は一筆富士や床の春　よし女
門波立つ明石海峡春嵐　せいじ
襤褸纏ふごと白菜の霜枯れて　うつぎ
早春の翠黛しるき遠嶺かな　有香
御堂へと急磴百段ご開帳　はく子
まなかひに房総半島風光る　あおい
村人ら総出に見守る野焼きかな　宏虎
春寒し流行の服を着たものの　ぽんこ

二〇一二年二月九日

日脚伸ぶポストに回覧板とどく　あさこ
春日燦ミシンの針も機嫌よし　あおい
お社へ万歩日和や梅探る　つくし
忌を修し終えし安堵や風花す　あさこ
鳥の巣を高きに抱く巨木かな　英子
海苔粗朶へ通ふ小舟の結び岩　よし女
裏山に慈母観音や涅槃寺　はく子
駐在の灯の消ゆるかと凍返る　雅流
風花や自転車ペダル重きかな　ぽんこ
お涅槃へ衣ひるがへす飛天かな　菜々

二〇一二年二月八日

軍手干すごとくに軒の干し大根　こすもす
肩だして大根畝に整列す　よし子
黒々と打たれし春田広がれり　英子
灯籠に触れては消ゆる春の雪　菜々
逆縁の涙乾かず風花す　あさこ
天を突くスカイツリーや風光る　あおい

二〇一二年二月七日

手に享ける竜の口より寒の水　あさこ
雨晴れて翠黛に春立ちにけり　きづな
かけている眼鏡を探す春炬燵　つくし
菜種菜のゆでで盛らるる白磁皿　満天
六地蔵極彩色のマフラーす　英子
春の雨天地返しの畑土へ　菜々
国道の穢は雪塊の落とし物　ひかり
草萌ゆる吾が句ごころも絶ゆるなし　雅流
草餅の黄粉なるべし膝払ふ　満天
鉄塔の影のはみだす雪野かな　とろうち
春宵や七十媼も千鳥足　きづな

二〇一二年二月六日

酒蔵の暗きに笑まふ享保雛　うつぎ
冴ゆる夜の近くで止まる救急車　百合
たまさかの外出にぽつと春の雨　あさこ
山風に襟合わせ行く探梅行　きづな
春雨に濡れて艶ます煉瓦道　菜々
ダンプカー満載の荷は捨てる雪　こすもす
通過する黄色の電車風花す　あさこ

二〇一二年二月五日

へっついに薪も積まるる雛調度　うつぎ
日差しいま棚田棚田の雪間かな　雅流
沈丁の一雨ごとにほぐれけり　満天
今朝晴れて流氷の沖一変す　ともえ
山笑ふ幼なの喋り言の葉に　ぽんこ
停泊す巨船の陰に浮寝鴨　なつき
立春やどさりと届く旅雑誌　満天
夜を徹し除雪車の音軋める　花茗荷
山の端に春の白雲遊びをり　菜々
海凪て箔を揉みをる四温晴　わかば
ただいまと風花髪につけ帰宅　きづな
緋鯉透く池のかたへの薄氷に　雅流
鞠はじけたるごと散りし寒雀　とろうち
冴返る吊り目いよいよ石狐　菜々
鳥居の朱塗り替えられて春来たり　つくし

毎日句会みのる選・二〇一二年二月一三日